
インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

学生逃避

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

【Nコード】

N6264Y

【作者名】

学生逃避

【あらすじ】

ISを使えることから、半ば強制的に入学させられた男、織斑一夏。幼馴染の篠ノ乃箒と再会し、数ヵ月が立ち四組に転入生が来るというニュースが舞い込んできた。その転入生は一夏や箒がよく知る人物だった。

処女作品なので、下手です。それでもよろしかったら、どうぞよろしく願います。

プロローグ（前書き）

短いですがよろしく願います!!

プロローグ

インフィニットストラトス、通称IS。現在存在している兵器をはるかに超える戦闘能力を誇る。

しかし、これには一つ欠点がある。

それは、女性にしか使えないこと。

これにより世界は、女尊男卑が当たり前の世界に変わった。

そして、ある男もISによって変わったのだ。

??? 視点

「本当にいいんだな」

「ああ、構わないさ」

俺は、目の前にいる男にそう言うと、男は心配そうな表情をしながら椅子に座る。

「なら良いんだが、あいつらは納得してないぞ。今も騒いでるんじ

やないか？」

確かに納得しないだろうが、もう決めたことだ。変えるつもりはないし、それに最後にはわかってくれるはずだ。

…多分、…おそらく、………うん。

「まあ、あいつらのことだから襲ってでも止めに来ると思うが、私が話しておこう。行って来い」

そして、俺は向かう。場所は……

IS学園。

プロローグ（後書き）

…短い!!

短すぎますね（泣）

ですが、今後ともよろしくお願いします。

1 翼（前書き）

連続投稿です。少しは話を作っているので早く出せればいいな、と思っています。

では、よろしく願います。

1翼

男はある建物の前にいた。そこはIS学園。しかし、ISは女性にしか使えないため必然と女子校となっていたのだが、あるニュースが世界に配信された。世界で唯一ISを使える男が現れた。その男の名は、織斑一夏。しかし、今此処に三人目の男が学園の門を潜る。

一方、世界で初めてISを動かした一夏は自分の姉であり、担任である織斑千冬の授業を受け終えていた。授業内容は、二組とのISの実戦訓練。そして今はIS訓練機の片づけをしていた。

一夏視点

「ふう、これで終わりですか？ 山田先生？」

「はい、お疲れ様です。織斑君」

俺に劳いの言葉を言っているのは、一組の副担任の山田先生。いつもあわただしく子供っぽい先生だが今回の訓練で国家代表候補生を二人同時に倒してしまう実力を持つ人。戦闘のときのように普段もしっかりしてればイイのに、神様もひどいよな。

「織斑君？ どうしましたか？」

「いいえ！ 何にも！」

いけねな。山田先生が心配して顔を覗き込んで来て、その際に豊満な胸が揺れるわけで。

「お、織斑君！ お、男の子だから仕方ないかもしれませんが。あまり見ないでほしいんですけど」

「あ！ その。す、すみません」

そして、気まずい空気と沈黙が漂う。まずい、話題を変えなければ！

「そう言えば、朝にほかの組にも転入生がいるって話があってんですけど、先生は何か知りませんか？」

「あ、はい。確かに四組に転入生が来るといことなんですけど――」

「ですけど？」

「まだ来てないんですよ。連絡もなくて」

不安そうな顔をしながらいう山田先生。確かに心配だな。

「でも、織斑先生は『あいつのことだから心配しても無駄だ』なんて言っているんですよ」

千冬姉がそんなことを。それに『あいつ』って一体？

「山田先生」

「あ、織斑先生。どうしたんですか？」

なんてことを考えていたら千冬姉が現れた。いつの間にいたんだ。

「例の転入生が来たんでな、私がそいつの世話をしなければならないんだ。だから、午後の授業は私の代わりに頼みたいんだが」

「あ、やっと来たんですか！ いやー心配してたんですよ」

「千冬姉転入生っていいー」

スパーーーーン！！

「織斑先生だ、バカ者」

清々しいぐらいの叩き方ですけど千冬姉、今何万もの脳細胞が死んだぞ。少しは加減をしてほしいぜ。

「何やっているんですか、千冬さん」

ふと千冬姉の後ろから男の声が聞こえた。え、男？

「お、織斑先生。後ろにいる男の子は一体？」

「こいつが、転入生だ」

「「えっ」」

「はい、そうです」

そう言った男は黒髪が目隠すぐらいの長さで、身長は俺よりも少し低いぐらいで華奢な体つきをしている。そして、なんだか懐かしい感じがする。

「久しぶりだな、一夏」

「え、何で俺の名前を？」

「何だ、忘れたのか？薄情な奴だな」

なんか呆れられているみたいだけど、って千冬姉もため息つかないでくれよ。

「あの、どなた様ですか？」

「仕方ないな。おい、答えてやれ」

「はいはい、わかりましたよ。千冬さん」

おい！そんなことを言ったら千冬姉の鉄拳制裁が――、って言うてるそばから！！

サッ！！

え、避けた？

「おっかないですよ。千冬さん？ いや、織斑先生って言った方がいいですか？」

「初めからそう言え」

バカ者、と小言を言う。

「お前今何やったんで」

「え、普通に避けたただけだけど」

何サラツと言っているんだよ！あの千冬姉の出席簿を避けるなんて、

「人間技じゃない」

「それは遠まわしに人間じゃないって言ってるよな」

あれ？なんかorzになっているんだけど。

「織斑、こいつは打たれ弱いんだ。あまり気にするな」

「わ、わかりました」

「ええ！！いいんですか？！」

山田先生がおろおろしながら言う。そんなことよりも

「すまないが名前まだ聞いていないんだが」

「落ち込んでる人に慰めの言葉も言わないとは、貴様は鬼か！！…
ああ、鬼の弟か」

ドスッ！！！！

ああ、今度は当たった。

「鬼とは誰のことだ？ぜひ教えてほしいものだな」

「すみません！だから、今振り上げている出席簿の下げて下さい！俺まだ死にたくない！！」

必死になるよな。俺だって死ぬんじゃないかって思うことあるかな。

「じゃあ、さっさと自己紹介しますか」

頭を掻きながら男がこちらを向く。

「本日からここで世話になる黒翼こくよく斑鳩いかるだ。よろしく！」

1 翼（後書き）

……変じゃないでしょうか？

それが一番の不安です。

お駒がしいようですが、感想をいただけるのなら、お願いします。

2翼（前書き）

今回は不安です。

大丈夫でしょうか？

2翼

――一六年前――

「一夏、元気だね」

「斑鳩こそ、またいじめられるんじゃないぞ！」

気弱そうな少年、斑鳩を心配する一夏。新しい場所で大丈夫なのか心配していた。

「大丈夫だよ。そんなに心配しないでよ、一夏」

「お前は弱いからな、何かあったら連絡しろよな！俺がすぐに行くから！」

「…それは箒ちゃんに言ってほしかったな」

斑鳩は一夏に聞こえないように言う。斑鳩は箒が一夏のことが好きだと知っていた。

知った時は驚き、そして自分のことのように喜んだ。だから、箒の恋が成就するように協力していたのだ。

しかし、箒はISの関係で一夏たちに何も言わず去ってしまった。

「斑鳩ー、そろそろ行くぞ」

「わかってるよ。じゃあね、一夏」

「おう、いつか会おうぜ！」

そして、斑鳩は一夏たちとの思い出の地去った。

斑鳩視点

「お前あの斑鳩か!？」

「あのって何だあのって」

全く失礼だぜ一夏。いくら俺が昔弱虫だったからって言っていることと悪いことがあるだろう。

しかし、俺も鬼じゃないから許してやろう。

「千冬姉聞いてないぜ！斑鳩が来るなんて！」

ドカツ！！

「何度言わせるんだ」

うわぁ、千冬さんマジ千冬さん。相変わらずの鬼のようにのに怖いな。

「黒翼、お前、まだくらいいたならもう一度やってやろう。うれしいだろう」

[illegible]

「お前も一夏みたいにわかりやすくなったから分かったんだ」

22

「いやあ、変わってないな」

なんだか視線が集まっているような気がするんだよ。

まあ、男が此処にいるなんておかしいしな。一夏は気にせずに話しかけているので、俺も視線を気にしながらも話を聞いている。

「斑鳩は変わったな。お前もISを動かしたのか？」

「ああ、さらに専用機も有るのさ」

俺は腰に鎖の付いた懐中時計を一夏に見せる。色は灰色で鳥の絵が描かれている。

「へー、ならあとで模擬戦しようぜ」

「いいが俺は強いぞ。瞬殺しちまうぜ」

「負けないぜ！」

こんな会話をしながら俺達は屋上に向かっている。

なぜかと言うと箒が昼飯と一緒に食べようと一夏を誘ったらしい。
十中八九二人つきりで食べたいと見た俺は断ろうしたが・・・

「大丈夫だって！みんないいやつだから」

と言うし、わかってないよこいつおそろく。ほかの女性も誘った
のだろう。

全く変わっていないね。箒がかわいそうだな。

「一夏」

「何だ？」

「予言してやる。いつか箒に背中を刺されるってな」

「は？どういう意味？」

なぜわからないんだ、このバカは。

「やはり、お前は少し変わった方がよかったよ」

「??:?」

そんなくだらない話をしてる内に屋上に続く扉の前に着いた。

「しかし、屋上が開放されているなんてな」

「まあ、珍しいって言ったら珍しいよな」

そして、いざ扉を開ける時に俺は一夏をいじるアイデアが浮かんだ。一夏、待ってろよ。

その時の顔はきつと悪い顔だったろう。

[illegible]

—
—
—
第一視點
—
—
—

私、篠ノ之箒は今機嫌が悪い。その原因は一夏なのだ。二人つきりで昼食を食べようと誘ったのだがあいつは他にセシリアや鈴、デユノアを誘ったのだ！ 全く！ せっかく二人つきりになれると思ったのだが一夏め！ あとで居合切りの練習台にしてやる！

「あら、箒さんどうかしたしたか？　なんだかご機嫌斜めのようです

けれども」

「そんなに眉間にシワを寄せていると老けるわよ、箒」

クッ！こいつら、私を心配しているが顔がにやけている！一夏、お前は微塵切り決定だ！！

トントン！

？ん、何だ？

「篠ノ之さん、ごめんね、本当は一夏と二人っきりで食べたかったんだよね？」（小声）

「い、いや！そんなことはありえない！！」

「クス、そういうことにしておくよ」

「それにしても一夏さん遅いですわね」

「何か山田先生と訓練機を片付けているみたいだけど」

それにしても遅い。ま、まさか、私の約束を忘れてほかの女子と
なにかやっているんじゃないか!?

「一夏さん、大丈夫でしょうか!」

「大丈夫でしょう。あの馬鹿を心配しても無駄よ」

「あら、鈴さん。他人を心配するのは普通のことだと思いますわ」

そして、睨み合う二人。背景に炎が似合いそうな雰囲気が続い
ているとなにやら話声が聞こえてきた。

この声は一夏の声だ!ん?待てよ。一夏は誰と話しているのだ。

此処はIS学園。つまり女性しかない。話しているのは必然的
に女性になる。

「「一夏(さん)!!」「」」

さっきの雰囲気はどこにダストシュートしたのか、三人がシンク

口した。そして一夏が屋上に現れ問い詰めた。

「一夏、いつまで待たせるのだ！それにさっきまで話していたのは誰だ！！」

「お、箒。実は斑鳩が来たんだよ」

「斑鳩？どこにいるのだ？」

「なに言っているんだよ。俺の後ろに――あれ？」

「誰もいないではないか。あれ？では誰と話していたのだ？」

そう言いながら一夏に近づいたとき

「うわぁ！！」

「箒！ってうわぁ！」

後ろから誰かに押され体勢を崩し一夏もろとも倒れてしまった。

「痛たた」

「大丈夫か？箒」

「ああ、大丈夫――」

そういいかけた時私は今自分がどのような状態なのか知った。私が一夏に覆いかぶさるようにつまり、押し倒すような体勢になっていた。

「ッ！！」

「おい、箒？」

ち、近いぞ！！一夏！し、しかしこの状態はいいかも知れない。これで一夏が少しでも意識するなら！

といいながら心の中ではドンと来い！と構えている筈であつた。

「いいじゃないか。俺はもう我慢出来ないんだ!!」

「い、一夏！」

そして、二人の唇が少しずつ近づいていった。

妄想終了

「フ、フフフフ。し、仕方ない。なら私が最後まで相手になってや

る。私に任せろ!!」

「あー、箒？涎が出ているんだが」

「…………ハッ！しまった。何を不埒なことを考えているんだ。
まだまだ修業が足りないみたいだ。」

「おいしい、箒」

「な、何だ！一夏」

少し声が大きくなってしまった。お、落ち着け篠ノ之箒。慌ててはいけない。

し、しかし少しは期待していいよな。

「そろそろどいてくれないか？重くて」

「…………」

「箒？」

「フン！」

ドカツ
！！！！

「グヘッ！？！」

期待した私が馬鹿だった。この朴念仁がそんなことをするわけがないな。

「・・・プツ」

「ッ！？！」

誰かに笑われたような気がした。しかし、セシリアや鈴はそんな様子もない。

デュノアも例外ではない。けれどもここには他に人はいない。

「箒、探しても無駄だよ。今は光学迷彩が起動しているから」

「だ、誰だ！」

「さっき一夏が言ってたじゃないか。俺が来ているって」

さっき一夏が言ってた？・・・アッ！

「斑鳩か！？」

「ハイ、正解だよ。よく出来ました」

そして、私の後ろにほっそりとした人の姿が浮き上がった。

「どうも、久しぶりだね箒ちゃん」

「斑鳩なのか！？」

「一夏もそんな反応してたね。さすが夫婦だね」

斑鳩が笑いながら言うが私の頭には『夫婦』という言葉でいっぱいだった。

「ふ、ふふ、夫婦!？」

「あれ? 違うの？」

一夏と夫婦。い、いい!

「ただいま！」

「おかえり、一夏」

玄関に向かい一夏の荷物を持つフリフリのエプロンを着た箒。

「ああ、ただいま箒」

「夕食の用意が出来ているぞ。風呂も沸いているし、どっちにする？」

「そうだな、先になにか食べたいな」

「そうか、分かった。では」

そういい台所に戻ろうとしたがいきなり一夏に腕を捕まれた。

「ど、どうしたんだ、一夏」

「箒、俺は夕食を食べるとはいつてないぜ」

「では、なにを食べるんだ？」

「分かっているだろ。食べたいのは箒。お前だ」

「・・・!？」

顔を赤くし驚く箒。しかし、心の中ではバッチコイ!と構えている箒であった。

「黙っているっていうのはいいという意味だよな」

「ま、待て一夏!?!さすがにそ、その、あ、汗をかいているんだ!だから、せめてシャワーを浴びてから」

「もうダメだ!箒!」

「キャッ!?!」

箒を押し倒す一夏。その目は腹を空かした狼のようだった。

「一夏」

「いいな?箒」

見つめ合う一夏と箒。その雰囲気はだんだんと加速していた。

「ああ、いいぞ一夏。私を食べてくれ」

そういう手を広げ向かい入れる体勢をする。

その姿は官能に満ち溢れていた。

「じゃあ、いただきます」

一夏の顔が近づいていった。

妄想終了

2 翼（後書き）

どうだったでしょうか？

変なところは、・・・多々あったと思います。

箒ファンのみなさん、箒をこんな風に書いてしまつてすみません。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

話が進むにつれて変更などがあると思いますが、宜しく願ひします。

主人公設定

名前 黒翼 斑鳩 (くろよく いかる)

性格は基本的には、おとなしく目立つのは控えているが知り合いには積極的になる。しかし、戦いになると無口になり、敵を倒すためなら何でもやる。

顔は大部分は髪に隠れている。目は黒く、吊り上り睨めつけているように見える。
(ソウル・●ーターの阿●羅を想像してもらえば良いかと)

家が武家のため、剣術、柔術、空手などをやっているため身体能力は高く、喧嘩も負け知らず。

簪とは婚約者であり、仲は良いが結婚までは考えていない。簪の姉――楯無は苦手であり、会うと一目散に逃げる。本音や虚とは幼少期のときによく遊びこれも仲は良好。

一夏と箒とは小学校のころにいじめられていたのを助けられ、このころから仲良くなった。

家族構成は、母 兄一人 姉三人。父親は事故で亡くなっている。

3 翼（前書き）

初めて、感想をいただきました！

そして、最近アクセス数が増えてきています！

これからも、皆さんに読んでいただけるように頑張って行きたいと思えます。

3翼

えーっと、どうしようかね。箒ちゃんがヘブン状態になって半分帰ってこなそうだし。しかも、涎を垂らしながらという乙女にあるまじきことを。

「ちょっと刺激が強かったかな？」

「おい、どうして隠れていたんだよ。あと、箒をなんとかしろよ」

「いや、恥ずかしかったから少し場を和ませた方がいいかな、と思って。あと、箒ちゃんについては今はそっとしておけば大丈夫だから」

ここまでの威力だったとは思わなかった。もはや、核兵器並だな。

「あの、一夏さん。この方は一体？」

「私にも説明しなさいよ、一夏」

二人の女子が一夏に迫っていた。

「え、えーと。お、幼なじみの――」

「あ、紹介するよ。幼なじみの黒翼斑鳩だ」

「ど、どうも！」

一夏に感謝だな。女性に話しかけるのはどうも苦手なんだよな。

「女に話し掛けることだけは相変わらずだな」

一夏みたいに気軽に話し掛ければいいけどさ。初対面だから恥ずかしいしさ！なにが悪い！！

「いや、悪くないけどさ」

「なんでわかった！エスパー！？」

「幼なじみだからじゃないかな？」

なんてことだ！一夏にばれるなんて

「惨めだ！鬱だ！死にたい！！」

「俺にばれたのがそんなにショックなのかよ！？」

「ああ、そうだな」（キリッ！）

「ハッキリと言うな！！そのまま落ち込んどけ！」

何だよ、そんなに怒ることないだろ。それよりも

「彼女たちを紹介してほしいんだけど」

名前がわからなければ、なんていったらいいかわからないし。

「おっと、そうだったな。セシリア、鈴にシャルルだ」

「イギリス代表候補生のセシリア オルコットですわ」

「鳳 鈴音よ。中国の代表候補生をやっているわ」

「ほうほう、彼女たちがお前の毒牙に掛かってしまった人かね。三人共ハイレベルだね」

「いや、一人は男だから」あれ、そうだったか。しかし、デュノアという子はどうも女性に見えてしまう。

「すみません。間違えてしまって」

「う、うん。気にしてない。僕はシャルル デュノア。今日、フランスから来たんだ。よろしく」

「これは御丁寧に。よろしく」

親睦の証に握手したが、デュノアの手は男とは思えない柔らかいものだった。やはり女性じゃないかな？

「さて、そろそろ昼飯にしようぜ。腹が減って」

「それもそうだな。このあと織斑先生に学園の説明があるし」

「織斑先生にですか？」

「何で千冬さんなのよ」

セシリアさんと鳳さんが尋ねて来る。

まあ、普通係の人に任せるのに俺がオロオロするから、特別に計らって貰ったなんて言えない！

「それよりも腹が減ってしょうがないんだよ」

「それもそうね」

「時間もおしているわけですしね」

「はい、一夏。これ」

鳳さんがタッパーを一夏に投げつける。中身は大丈夫なの？

「バカ、食べ物を投げるな。おお、うまそうな酢豚だな！」

「今朝作ったのよ。感謝しなさい。何なら鈴様って言ってもいいわよ」

自己主張の無い胸を張っている鳳さん。何と云うか、非常に残念です。

「・・・あんたさ、なにか失礼なことを考えてたでしょう」

「いいえ。そんな初対面なのに胸が小さいな、なんて失礼なことは
思っていないですから」

「きっちりかっちり思っていること言っているじゃないの!!」

し、しまったあ! 口が滑った!!

「あ、す……すみません! ない胸を張ったのでつい言ってしま
いました」

「一夏! こいつシメていい!?!」

ギャアアア! さらに悪化させている!?!

「落ち着け、鈴! 斑鳩も煽るなよ!」

「煽るつもりは無かったんだよ!？」

「鈴さん、レディーなら少し抑えるべきですわ」

そして、一夏とオルコットさんが鳳さんを抑えるのは数分後だった。

— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —
— —

危なかった!まだクラスにもいってないのにこんな状態じゃあ先が思いやられるよ。

「さて、俺も食べるとするか」

バックの中から弁当箱を取り出し、ふたを開ける。
ちなみに中身は一口コロツケ、ほうれん草のごま和えに卵焼き。
そして、白いご飯である。

「へえー、うまそうだな。誰が作ったんだ？」

「もちろん、自分でだ」

「何だ、お前料理できたのかよ？」

「まあ、できるのにこしたことはないからな」

姉さんに扱かれたからな。やれ薄味だとか濃すぎると文句しか言わないし、俺は初心者だって！

「なあ、これ食べていいか？」

「構わねえけど、文句言うなよ」

「分かってる」

一口コロツケを手で取り、口に運ぶ一夏。

「お、旨いな！」

「ならいいが」

と素っ気なく言っているが内心、不安だったのは読者さんと俺だけの秘密だぜ。

なんたって家族以外に食べてもらったのは初めてだからな。あれ

？読者って誰？

「どうした、斑鳩？」

「いや、何でもない。なんか変な電波をキャッチしただけだから。それより、箒ちゃん。そろそろ戻って来ようよ」

箒ちゃんの肩を叩き、反応を見る。

「あゝ、一夏！そんなに激しくされたら私は――、ハッ！」

「戻って来たか。お楽しみの中でただと箒ちゃん、昼休みの時間がなくなるからいい加減一夏にお弁当渡したら？」

「う、うむ。一夏、こ……これを！」

「お、おう」

一夏が弁当箱を受け取り、ふたを開ける。

その中には、鳥のから揚げにきんぴらごぼう等と和食のメニューだった。

「すごいな、箒ちゃん！おいしそうだな」

「かなり、手が込んでそうだ。貰っていいのか？」

「つ、ついでに作ったのだ！き、気にするな」

「けれども嬉しいぜ。ありがとう、箒」

「そ、そうか・・・」

なんかいい雰囲気になってるよ。いいね、いいね。最っ高だね！
・・・なんかキャラが違うような気がする。
しかも、オルコットさんと鳳さんはなにやら不機嫌そうだけど。

「一夏さん！私のサンドイッチもよければどうぞ！」

「あ、ああ。あとで貰うよ」

顔が引き攣っているぞ、一夏。

「一夏、どうしたんだよ？昔のお前なら喜んで貰うのに」（小声）

「い、いやあ。実はな、セシリアの料理は見た目はいいけどさ、味がすごいことになってるんだよ！」（小声）

「そんなことがあるわけがない。あんなにおいしいなのに」

「じゃあ、食べて見ろよ。セシリア、このサンドイッチ、斑鳩にやってもいいか？」

「ええ、構いませんわ」

どうぞ、と渡されたサンドイッチ。本当にまずいんだろうか。

「では、いただきます」

パクッ

「!?!?!」

こ、これは!

「ねえ、黒翼くん。僕にもお弁当、少し分けてもらっていいかな？」

「ああ、構いませんよ。どれがほしいですか？」

「じゃあ、卵焼きもらえるかな」

うむ、デュノアくん。なかなかいい目をしているね。この卵焼きは自信作なんだよね。

「うん！美味しいよ！料理上手いんだね」

「そ、そうかな？」

「そうだよ！あとで教えてくれるかな？」

「い、いいですよ！俺でいいんだったら」

なんかデュノアくんすぐに仲良くなれそうだな。

「一夏さん、お口を開けくださいまし！」

「一夏！食べさせてあげるから口開けなさいよ」

そして、一夏。あなたは一体なにをやったんだよ！

なんでオルコットさんと鈴さんが、あなたに乗りかかるようなカ
オスな状況で、取り返しがつかないことになっているんだよ！

「みんな仲睦まじいんだね」

「いやデュノアくん、あれは襲い掛かっているんだって！？止めな
いと！」

以外とデュノアくんって天然？！

・・・いやツツコんでいる場合じゃない！早く止めないといろい
ろ大変なことになるって！

そして、波乱の昼休みが終わった。

3翼（後書き）

簪がまだ出てこない（泣）。

しかし、次回では出すつもりです。

次回も読んでいただくと嬉しいです。

4 翼（前書き）

ようやくヒロインの簪が登場！

でも、うまく書けているか不安です。

では、どうぞ！！

4 翼

「――という所で説明は終わりだ。何か質問はあるか？」

只今千冬さ・・・じゃなかった。織斑先生に学園について説明を受けています。

え？なんで飛んだんだって？それは作者の力不足ということです。許して下さい。

ズバーン！

「私が話しているのに、考え事をするとはいい度胸だな」

「す・・・すみません。あ・・・後、質問があります」

「なんだ？」

「俺はどここの部屋ですか？」

これはとてつもなく重要な事だ。うん、死活問題だからな。
願わくは一夏かデュノアさんと一緒に部屋に！

というよりも絶対にその二人のどちらかにしてください！

「お前には悪いが女子と同じ部屋になってもらう」

………終わった。俺の人生、十五歳にして終了か。俺が女性
が苦手って知ってるよね！

ああ、なんか走馬灯が見えてきた。

「ああ……なんだ。ショックなのはわかるが、あまり落ち込むな」

「無理ですよ、そんなの。……なにニヤニヤしているんですか？
！」

「なに、予想通りの反応だったからな。ちなみに織斑はデュノアと
一緒に部屋と私が決めた」

「故意なんですか！確信犯なんですか！なら一夏をまた箒ちゃん
と一緒に部屋にすればよかったじゃないですか」

箒ちゃんが大喜びするしね。

その方がみんなハッピーになるし。うん！その方がいい！

「そんなこと認められるか。一夏が襲われたらどうする！？私はまだ、一夏をやるわけにはいかないのだ！これは決定事項だ！」

「一夏の身を案じているんですね！？わかります！しかし、俺の身も案じてくださいよ！」

「だが、断る！」

ダメだ、どうしようもないくらいブラコンが進んでいるよこの人。もし一夏が結婚するようになったら姑以上にうるさそうだな。

「大丈夫だ。そんな女は作らせないし、もしできたならコンクリートで固めて、海に沈めてくれる！」

「大丈夫じゃない！大問題ですよ！？」

本格的にやばくなってきたよ。逃げていいんだ、逃げていいんだ、逃げていいんだ！

・・・え？普通、反対だって？いや無理だって！！

「織斑先生。何をされているんですか？」

なんか助けが来た！確か、えーつと・・・山田先生！

「あ、嗚呼。山田先生か？今こいつの部屋を教えるところだ」

助かりましたよ、山田先生。今ならあなたを神と崇めてもいいよ！

「では、部屋の番号を教えるからそこにいけ。私は仕事が残っているからな」

「では寄り道せずに言ってくださいね、黒翼くん」

寄り道する所あるのかね？まあ、部屋については諦めるか。
 なんかもう、世界の理みたいな壮大なことみたいだし。

反対したら、命がいくつあってもたりないって。早く部屋に行こう。

そして俺は足を進める。

[illegible]

――――

「ここだな。・・・うん、間違えない」

教えられた部屋の前に到着したんだけど、

「ねえ、あの男の子ってあの噂の？」

「みたいよ。しかも、織斑くんと仲よさそうだったし」

「もしかして、織斑君とできているのかな！」

・・・女子の視線が痛いです。って最後の！
俺はそっち方面じゃないからな！？断じて！一切合切！微塵も！！
ここに居ても仕方ないし、入るとするか。

「し・・・失礼します。誰か居ませんか？」

入るとそこは高級ホテルのような部屋が広がっていた。さすがI
S学園ということだろう。パソコンやらふかふかのベットがあるし。
けど、部屋に誰もいないんだよな。織斑先生がいうには女子と同
じ部屋だっていったよな。あれは嘘だったのか？だったら、感謝

しないとな！では部屋の確認をするか。

まずは、シャワーからかな。一夏が大浴場は使えないから気をつけろ、ってたからな。いざ、使おうという時に使えなかったらやだし。そう思いシャワー室に向かう。

「ほうう。なんか使うの、もったいない気がするな」

だってすごいんだよ。きれいで高級感が漂ってるんだぜ。こんな所に暮らすとなると、なんだか緊張するな。

「・・・誰か居るの？」

「ッ!？」

こ・・・声がしたな。しかも、シャワー室から。・・・となると今女子が使っている?!

まずい、マズイ、まずいでしょ!

「・・・本音?今・・・出るから」

しかも、誰かと勘違いして出てきそうだし!ヤバイよ、ヤバイよ! ああ、ドアを開けないで!

「・・・・・・・・誰？」

「あ、アハハッ」

ドアが開いてしまい、乾いた笑い声を出すしかなかった。

中から出てきたのは空の青をそのまま写したような色で髪は肩までかかり、髪先はくせなのか、内側に向いている。しかし、どうしてだろうか。その子は俺の顔をまざまじと見ている。

「あのー、俺の顔になにか付いてますか？」

「・・・・・・・・斑鳩？」

「え、なんで俺の名前知っているの？」

「もしや、知り合い？でも誰だ？・・・・・・・・それよりも！」

「な、なにか、着てもらいたいんだけど」

「・・・・・・・・？・・・・・・・・！？」

自分の状態に気づいたのか、シャワー室のドアを壊れるんじゃないかという勢いで閉めた。

あ、ヤバい。鼻血が出てきたの。ティッシュは何処に。

――数分後――

「失礼なのは承知で聞きます。あなた誰ですか？」

「・・・本当に・・・覚えてない？」

そんな捨てられた子犬のような顔をしないで。

「・・・すみません」

「・・・グスン」

「あ、ああ!?!泣かないで下さい!お願いします!なんでもしますから!」

「・・・ほんと？」

そんな捨てられた子犬の以下省略。

「本当ですって！神に誓って！」

「・・・じゃあ、許す」

よかった。一気に肩の力が抜けたよ。

「じゃあ名前、教える。私は更識 簪。・・・覚えてない？」

更識 簪。・・・え！？もしかして！

「かんちゃん！」

そういうと簪——かんちゃんは俺に抱き着いて来た。

「えッ！ちょっと、かんちゃん！？」

俺の体に慎ましいも軟らかい物が当たってるんだけど！

「うん・・・うん！そうだよ、私・・・だよ。会いたかった、斑鳩！」

なんか抱き着く力がさらに強くなってるって！
ヤバい、鼻血が出てきた。

「かんちゃん、嬉しいのは分かったから離れてくれない？」

「・・・やだの？」

「そんなことはない！むしろこのまま、ベットに――ゲフンゲフン！」

何、言おうとしてたんだ、俺！まるで変態見たいじゃないか。

「・・・斑鳩」

「な、なんでもないよ！？気にしないで！」

「わ・・・私は・・・構わないよ」

「・・・はあい？」

なんて言った？もう一回？今の言葉、もう一度お願いします。

「だ、だから！私を・・・押し倒し——」

「ストップ！！ストップですよ、簪さんや！」

何言ってるんだよ！女の子がそんなこと言っちゃダメだって！？

「だって斑鳩に・・・ならナニされても・・・いいよ！」

顔、真っ赤ですよ、かんちゃん。俺も顔が熱くなっているのがわかるし。

「でもそんなことしたら、ダメっしょ」

「・・・者なのに？」

「ん？なに？」

小さすぎて聞こえなかったよ。

「だから！こ、婚約者なのに？」

・・・そう。俺とかんちゃんは婚約者なのだ。

俺の家——つまり黒翼家とかんちゃんの家、更識家は親が仲が良く、困った時は助け合っているのだ。俺とかんちゃんもそれで知り合った。

それで両家の仲を堅くするために、お互いの子供を結婚させようということとなり次男の俺が選ばれ、更識家からは簪が選ばれたのだ。

「いや・・・婚約者だからって、それは・・・流石にまずいんじゃないかな？」

「・・・なんでもするって・・・言った」

今使いますか、それ！？拗ねた顔をしない！

「お願いします！他のことにしてください！」

「・・・分かった・・・」

いや、そんな残念そうにしないで。

「・・・それより、斑鳩はどうしてこの部屋に来たの？」

「あ、ああ。実はこの部屋に配置されたんだよ」

「えっ!？」

そりゃあ驚くよな。俺も驚いたもん。

「・・・じゃあ、一緒に・・・寝食を」

「ともにするだろうな」

・・・かんちゃんが固まった。まあそうなるよな。

「・・・本当？」

「本当」

「・・・マジ？」

「マジ」

なんか肩を震わせ始めたよ。と、とりあえず話を変えないと！

「かんちゃん！」

「・・・!? な、なに？」

少しびっくりした表情を浮かべていた。なにか考え事でもしていたんだろうか？

「とにかく、これから宜しく」

「う・・・うん！ 宜しく！」

そういったかんちゃんの顔は少し赤くなっていた。

4 翼（後書き）

というわけで、ヒロイン登場です。

今後も簪を可愛く書いていきたいと思います。

P S 来週からテストが始まるので投稿は遅れます。
誠にすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264y/>

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

2011年12月3日19時47分発行